

学会誌における専門家の位置づけ

1. はじめに

昨今、人口に膾炙^{かいしや}してきている技術者倫理の教育は、工学という学問の全体像を踏まえたうえで、社会の仕組みや会社の組織にかかわる人間の問題を、世間知らずの学生に教えるという意味ではうまく機能し得るものとなっているように見受けられる。技術者としての責任の自覚はこれらの背景を通じて理解されることになるからである。

もちろん、技術者となるべき学生に将来起こり得る責任というプレッシャーを与えるだけでは、技術者になろうとする気概を失うことにもなりかねない。この場合、前提とされるのは、技術者が、医者や弁護士のように専門職としてうまく位置づけられることである。そして、このときに大事になるのは、技術者になったときに個人としてプロ意識を持つことを支える専門職団体の貢献であろう。医師会や弁護士会はそれなりに、専門職の立場の支援を行っている。

以下、工学系の学協会の機関誌を概観しつつ、専門家としての支援がどのように行われているか、ということに関する現状の分析を行う。

2. 医学系誌

まず、典型的な専門職として医師を取り上げる。「日本医学会」はその分科会として、医学にかかわる百余りの個別のテーマ、たとえば「日本ウィルス学会」(テーマごとに機関誌をもっている)などを含んでいるが、「日本医療・病院管理学会」などの医療従事者を扱う学会も含んでいる。また、(社)日本医師会の発行する『日本医師会雑誌』においては、たとえば「脳卒中医療連携の現状と問題点」と題する特集が生まれ、医療技術にかかわる情報の紹介が行われている。それ以外に、一般的な教育的コラムに加えて、「医療係争事例から学ぶ」と題した論文が連載されている。この論文は、専門職として働く場合に遭遇する問題を扱っている。また、医学・医療界の動向を知るための雑誌として、『週刊 日本医

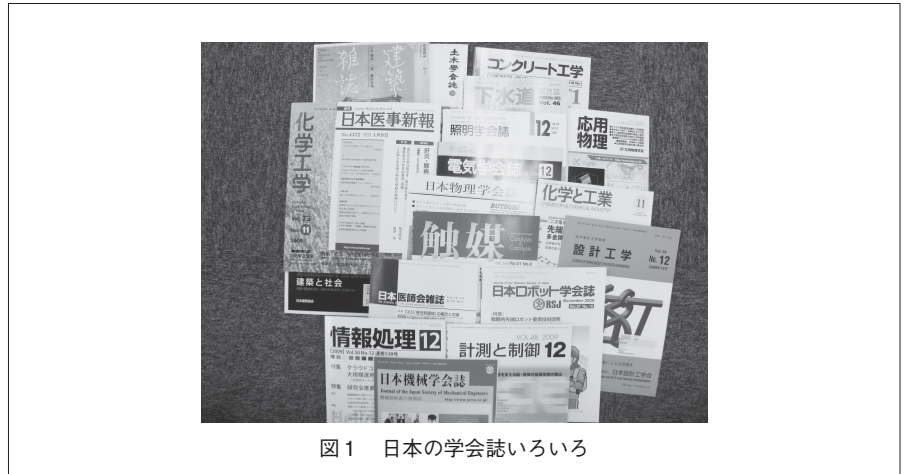


図1 日本の学会誌いろいろ

事新報』がある。ここでも、医療技術の紹介以外に、たとえば「診療報酬引き上げの是非で攻防—中医協」(No.4466)というニュースも取り上げられている。医師という専門職にかかわる雑誌は、個別的な技術を扱う論文以外に、医療従事者の地位や仕事にかかわる問題も常態として扱っていることがわかる。

3. 学協会誌

以上を踏まえたうえで、学協会の機関誌を概観しよう。

たとえば、理学系の機関誌、『天気』、『生化学』などでは、エッセイや研究動向の記事、大会の運営についての記事は含まれるものの、研究論文と解説がほとんどを占めていて、会員の職業意識がとくに問題とされているわけではない。ちなみに、『日本物理学会誌』では、解説論文だけでなく、最近では「ポストク」問題」という就職時の問題が連続して取り上げられている。

『日本ロボット学会誌』、『非破壊検査』、『人間工学』などの専門的な工学系の学協会の機関誌においても、特集を通じて会員への啓蒙を行うことが中心で、技術者の専門職としての位置づけが論じられることはあまりない。

少し異なった様相を見せるのは、多くの会員がいる土木系、建設系の学会誌である。『都市計画』、『建築と社会』などでは、技術者の専門的知識を生かす場面を規定する法令や行政の動きま

でも、資料やトピックスとして取り上げられている。

さらに、『コンクリート工学』では、「コンクリート技士のページ」などがあり、公的な資格にかかわる技術者が取り上げられ、資格を中心とした職業意識の維持を目指している。さらに興味深いのは、『土木学会誌』である。たとえば、「論説委員会の頁」の中で、「土木授業と土木技術者の将来」のような論説が載っている。多くの工学系の学会誌の中で、個人的なエッセイとは少し違った、専門職を踏まえた論説という議論に基づく提案を学会誌の中で取り上げているのは興味深い。

4. おわりに

学生に対する教育を越えて、成熟した技術者がプロ意識をもつためにも、技術者協会の学会誌が先導的支持を与える必要があるだろう。薬学系の継続教育では、数年目までの初心者には技術的知識を与えているが、最終的には「薬剤師や薬局に関する諸制度に対して政策提言ができる」⁽¹⁾人を養成したいとしている。技術論文の掲載は基本としても、それ以外に、技術者の立場について学協会として議論の場を与えることも必要ではないだろうか。

(原稿受付 2010年1月25日)

[斉藤了文 関西大学]

●文 献

- (1) 平野伸幸, 現場発の実践的な研修で中堅薬剤師を育てたい, 日経ドラッグインフォメーション, No.109 (2006), 11.